

日本常民文化研究所展示室 収蔵資料「小さな和船模型」

期間：2018年10月5日（金）～2019年3月13日（水）

会場：神奈川県横浜キャンパス3号館 神奈川県日本常民文化研究所展示室

小型船の小縮尺模型

昆 政明

和船模型作りで「現代の名工」に選ばれた近藤友一郎氏の船舶模型は、神奈川県横浜キャンパス3号館企画展示室や館外貸し出し等でこれまでも紹介してきた。近藤氏の模型は独自の調査に基づき、その優れた技術により船型を忠実に再現していることに特徴がある。その特徴は、弁才船などの大型船の模型だけでなく、磯船や川船のような小型船においても同様である。近藤氏は模型の製作に当たっては、縮尺に応じた図面を描き、それに従って製作している。これらの図面類やもとなった資料も旧近藤和船研究所の資料群に含まれており、今後それらの整理と活用も行う必要がある。

今回の日本常民文化研究所展示室のケース内展示では、これまで紹介する機会がなかった、川船、伝馬船、長崎のペーロン船、鯨船といった小型船の小縮尺模型を中心に紹介した。特に川船については、漁船、運搬船、渡し船など河川環境や用途の違いによる船型の変化を見ることができた。伝馬船は橋船とも呼ばれ、海陸連絡用の小型船であるが、地域によっては漁船としても使用される。和



写真1 会場の入り口。ガラスケースに展示。手前は「海の漁船 チョロ船（三重県）」
「びわ湖の漁船」

船は御座船を別にすれば、船体に塗装しないのが一般的であるが、鯨船ははなやかに塗装されている。また、船競漕用の船体は一般の船体より長さとの比率が大きく異なっている。長崎のペーロン競漕は現在も盛んに開催されておりペーロン船の新造も行われている。近藤氏製作の模型では明治時代から昭和にかけての変遷をたどることができる。

近藤氏の模型の魅力のひとつは、縮尺に応じた船材の年輪の細かさである。年輪の幅が狭ければそれだけ実際のスケール感を表現することが可能になる。小型模型の場合それが特に重要な要素となることを、「小さな和船模型」で知ることができた。



写真2 沖掛している本船と陸との連絡用の「伝馬船」(左側)。「仁淀川の川船」と「天竜川の渡し船」(右側)



写真3 富士川の渡し船



写真4 ペーロン船
(手前から明治時代・大正時代・昭和時代)



写真5 勢子船(鯨船)



写真6 航海の安全や大漁の願いが込められた船絵馬も合わせて展示した